

吉井勇論 (II) — 第一章 家系 その二

鷺 只 雄

はじめに

私はこれまでに吉井勇について二つの拙稿（吉井勇『酒ほがひ』〔明43・9・7 昴発行所〕に校訂・注釈・解説を施した拙著「和歌文学大系29・明治書院・近刊予定」及び「吉井勇論序説——初期習作と家系をめぐって——」〔平8・3・14「国文学論考32号」都留文科大学国文学会〕参照）を書いただけの、短歌にも、勇にも全くの門外漢であるが、その素人の気楽さから率直に言わせてもらおうと、吉井勇の研究は非常に遅れていて、伝記の面でも作品研究の面でも基礎的、基本的な調査さえ行われていないのが現状である。勇の第一歌集『酒ほがひ』に全注釈を施す仕事をしてみて、そのことが肌身にしみてわかると同時に大いに困惑した。家系や伝記について信頼すべき調査は殆どなされておらず、勇の回想に従っているのが実情で、そのため回想には思い違いや齟齬が多く、それが何時の

ことなのか、それが本当なのかどうか、判断できない事態に遭遇することになったからである。

また作品についても同様で、作品の初出調査もごく一部になされたのみで、永く放置されたままであった。

そうした状況からの前進をめざして前掲の拙稿では資料の新たな発掘と調査を試みた。これに対して早速、歌人で短歌史研究の重鎮である篠弘氏が「東京新聞」の「短歌月評」（平9・1・5 2面）で、

子規・左千夫・茂吉をはじめとする根岸短歌会にたいして、新詩社の「明星」派の歌人研究が遅れている。夭折した啄木ぐらいいではないか。『白秋全集』が完結した白秋もむしろこれからである。鷺只雄「吉井勇論序説——初期習作と家系をめぐって」（都留文科大学「国文学論考」32号）といった研究が、ようやく出現してきた。

として、紹介して下さったのは望外の幸であった。もっぱら二十世紀の小説を研究対象としてきた専門外の私にとってはこれは大きな励みであり、稿を続ける上での支えとなったからで、氏のご厚情にあらためて感謝しておきたい。

前稿にも記したように、吉井家の家系——特に祖父友実についての膨大な資料と父幸蔵についての資料については既にマイクロフィルム化して入手しており、目下解読・整理中であるが、B4判で恐らく一万枚を越すと思われる分量であり、書類・書簡の年月日決定・更に殆どが達筆な毛筆で書かれていてその判読に時間がかかるなど困難な問題が山積しているため、それら全てが解決してから発表ということになる、いつのことになるかわからないので、とりあえず、祖父友実の日記を整理要約して彼の生涯の行実を明らかにした上で、周辺の事実を積み重ねていくことにしたい。

祖父友実から始めるのには、幕末まで「薩摩藩の軽輩」（吉井シヅ子「勇の母」）「私は百二歳・一世紀を生きてきて」（昭和42・3「文芸春秋」引用は山崎朋子編『女の生き方40選 上』平7・4・10 文春文庫 による）であった吉井家を友実が、西郷隆盛や大久保利通と共に国事に奔走して大いに家名をあげた中興の祖であるからで、彼は明治天皇の信任厚く、伯爵となり、元老院議員・日本鉄道会社社長・宮内次官・枢密顧問官などを歴任した（一八二一年生まれ〜九一年没）。

また、友実は勇の言によれば「歌の師」（「解説」昭27・7・25『吉井勇歌集』 岩波文庫）でもあるからで、実際残された資料からみても、友実は自由に歌を作り、知友と歌会を催し、絵を描き、歌日記や紀行文をものするなど、殺伐無風流な薩摩隼人とは大いに

趣を異にし、風流韻事を楽しむ風雅の士でもあったことを証しているからで、その点からも友実の究明は重要であるが、その点については前掲の拙稿でふれたのでここでは繰り返さない。

ここで友実の日記というのは宮内庁書陵部蔵『三峰日記』のこと、一から七まで全七冊あり、明治2年2月26日（本文を除いて題簽類は「自明治二年五月」と記すが、これは臨時帝室編修局で大正一一年一月に吉井家から借用して転写した際に誤記したものと思われる。というのは本文は「明治二年二月二十六日」から記述されているからである）から明治21年1月10日まで記されている。無論、途中の脱落も多い。

先程もふれたようにこれは原本ではなく、毛筆による転写本なので体裁については簡単にふれておくと、和綴りの冊子本で、タテ27・3センチ、ヨコ20センチ、タテ野一頁10行。第一巻の本文記載頁数は137頁であるが、これは巻によって多少の異動がある。参考までに記すと、日記の本文記載頁数は次の通り。

- 一——一三七頁（明2・2〜5・5）
- 二——一五二頁（7・3〜7・12）
- 三——一五九頁（12・1〜12・12）
- 四——一六六頁（13・1〜13・11）
- 五——一四三頁（14・1〜14・9）
- 六——一八四頁（16・1〜16・12）
- 七——八〇頁（17・1〜21・1）

繰り返して言うが、以下の日記の記述は「三峰日記」の翻刻ではなく、私が必要と思われる部分を取捨選択の上、それを整理し、要

約したものである。原文を一、二例示す。

明治二年二月二十六日

中将公前浜御乗船正午御出帆同二八日夜十二字大坂川口へ御着

船同二九日御上陸本願寺へ御宿陣相成ル

岩倉卿御在坂ニ付淀橋御上り場ヨリ直ニ御使者被仰付

長州侯ニハ二六七日頃御上京相成候由承ル

永山源蔵へ公用人被仰付候御書付相渡ス岩倉卿へ二ヶ條之御趣意

申上云々ノ御返答アリ

三岡八郎會計方被免長岡左京御召捕相成タル由

函館千人計決死其外瓦解ノ勢ニ候由

東京奥羽之間平穩

攘夷家盛ニ成立有志会ナド有之候由

木戸未タ帰京無之広沢病氣ノ由

同年三月五日

林良輔野村右中建白書持参今晩入御覽候所願クハ両藩御寵遇之願

意列藩へ推及一視同仁之

叡慮貫徹仕候様之御趣意書加へ方御沙汰有之

原文は右のような漢文訓読体・漢文体・候文体などの混淆した独得の文体で書かれており、また、日記であるために人物の説明などがなく、しばしばイキナリ固有名詞が登場するために理解の困難な部分もある。

凡例

以下に本稿の日記を記述するに当たっての凡例を示しておく。

- 1 原文の趣を出来るだけ尊重して文語調を模したが、表記は新字、新仮名とした。但し、詞書、和歌などについては原文通り旧仮名とし、その他の場合についてはそのつどことわった。
- 2 友実の行実を主としたために、それからズレルものについてはカットしてあることをおことわりしておきたい。ただし、固有名詞についてはできるだけ拾い上げることにした。
- 3 外国の地名の表記で確認できるものについては、可能な限り今日の表記に改めた。同じく人名については確定しがたいものが多いので原文の表記のままとした。
- 4 誤記・誤脱と思われるものについては改めたが、中には（ ）を付して。その中に正しい表記を示した場合もある。
- 5 時刻表示は1〜24時制とした。
- 6 （ ）内の記述はことわりがない限り、驚の付した注である。
- 7 以上がそのあらましであるが、これ以上の件についてはそのつどことわった。

以上のようなまえがきと凡例を付した「はじめに」をつけて拙稿

「吉井勇論（I）——第一章 家系 その一」（97・3・31「都留文科科大学大学院紀要1」）を発表した。本稿はそれに続く第二稿で、明治12年4月1日〜同13年5月31日までの期間のものである。

明治二二(1879)年(承前)

- 4月1日 工部・宮内両省へ出頭。大原重徳卿死去につき参上し、金千匹、せんじ一壺献上。遺体との対面を申し出るが取り乱した有様につき断るとのことと対面せずして帰る。大山宅で晚餐。19時から参内、広沢参議暗殺の件につき、判事と検事と議論両立の旨司法卿から申し上げる。マクマホン特権を持って「バセーン」の死罪を免じた一件などを申し上げる。栄吉、熱海から帰る。
- 2日 工部省へ出頭、11時から宮内省へ出る。両大臣・侍補と会議、習志野行幸並びに副島文学係兼勤の議あり。14時から上野へ花見に行き、帰途岸良を訪問する。
- 3日 神武天皇祭につき参内。今日正治が岩倉殿と対面する予定なので、午後伊地知正治が来ることを岩倉公にあらかじめ書面で申し出ておく。嶺・小川兩人が来て、支那の販売が大いに都合よしと言う。夜、松方・建野・山田・狛林之助が来て会食する。釜石鉄山の他種々快談する。宮島も来て、正治は一泊する。西行法師が弓矢の話をお願い朝の前でした時、豪雄悉く鳴りを静めて深更まで聞いていたという。また下河辺行平が衣服を売って弓を買いて頼朝に土産にした話を正治がする。
- 4日 大原重徳卿の葬儀に行く。
両大臣、参議も会葬、谷中天王寺に葬る。午後から宮島
- 5日 聖上、三条邸へ行幸、大臣、参議従う。天機麗しく、有栖川宮、伏見宮とお話なされいと有り難くおぼゆ。画家川上寛、藤堂凌雲が天皇の前で揮毫する。15時頃還幸。この夜井上宅でリードを饗応する。榎本、川村等来る。
- 6日 嶺寛壮が来て清水氏が香港へ到着の電報があり、また同港へマツチを送り大いに景気がいいと話す。幸蔵から手紙が来る。松田が来て囲碁。庭前の桜満開。午後から深川親陸園に集まり宴会を開く。来会者は三条公・東久世・壬生等の家族その他加藤有隣等なり。書画・囲碁等の興あり。開源通流是經濟之大道也の字を三条公に揮毫して貰う。
- 7日 幸蔵より来簡。工部省へ出頭。土方へ副島・伊地知の件を急ぎ運ぶように連絡する。午後、本田へ行き函師銀行の件を依頼する。16時過ぎから大隈の晚餐に招かれ、イタリア、ドイツ、アメリカの公使も来る。田中長兵衛から二百円の受け取りが来る。
- 8日 工部省へ出頭。明治丸琉球へ発船。鍋島氏送別のため高崎へ招待される。柳原・嵯峨・東久世・土方・原等来会。今夕宮島で宴会、伊地知恒庵来会、おとよの浄瑠璃を聞く。正治・本田は不参。土方から伊地知云々の儀を聞く。
- 9日 金禄公債証書九百九十七円五十九銭がきて山田を委任として差し出し、二円五十九銭は現金でくる。ピート夫婦が家宅見聞として来訪。工部省と宮内省へ出頭。今夕、

- 三浦・宮島・伊地知恒庵等と麻布の正治を訪問。華族を諸県へ返す案を宮島が話す。岩下方平から一封くる。
- 10日 9時に出て王子製紙場へ臨幸。還幸の途中前田家へ寄り、葛城・張良・望月の能を御覧になり18時に晚餐、21時に還幸。供は岩倉・大隈・井上・徳大寺・杉等。
- 11日 工部省へ宅地の坪数を報告。今村から清水氏帰国の電報が届き15時頃から赴くも、漸く20時頃元気に帰宅。山田も来て23時同車して帰る。それから大山へ行くと、西郷も来て24時まで談話。
- 12日 朝三条公宅に参上し、習志野行幸の件御内儀向伊藤侍医の件並びに伊地知にご面会の件等を話す。大蔵省へ行き、油・石炭・金の件を卿輔へ話すに、起業公債で着手可能とのことという。ペール氏が西郷に依頼の件で来訪。夜、松方と同道で正治へ行く。経師屋が屏風を張りに来る。
- 13日 朝、時計を掛ける。目黒の西郷別荘に行く。ハーブル・レカレス・大山・川村等が同席し、14時過ぎ帰宅。幸蔵初め一同熱海から帰る。15時から清水・河瀬・関口など来て1時まで話す。内容は製菓場に機械据え付けの件等。
- 14日 今暁2時過ぎ大山に女子出生。宮内省に出頭。夜、松方へ行き兵器・弾薬製造、鉄道架設、殖産の三大件御着手の件につき談合。昼に、副島が来て支那公使が都合により帰国とのこと―琉球の件につき琉球は惜しむべきにあらざるも、置県の儀は不承知という。
- 15日 工部省へ出頭。芝切り通しの石井某の邸宅を見る。ハーブルから提供の器械を受け取る。夜、大木司法卿の晚餐
- 16日 工部省・宮内省に出頭。右大臣殿佐々木御前に伺候して、教育の儀真に大事にて漢学者でもよからず、勤王家でもよからず、福沢・加藤等の如き西洋学者も注意したきものなりと申し上げた由。清輝艦明後18日に着港につき水夫たちに酒肴を振る舞うのが適当と決まり水交社に行く。野津藤州から書状並びに掛け物一幅届く。
- 17日 工部省に行き、高島石炭山の件、黒田の件を聞く。午後、陸原・大山来る。
- 18日 工部省に出仕。地券二枚、林に渡す。11時の汽車で横浜に赴き清輝艦の帰朝を出迎える。12時に着港、早速乗艦し井上に面会、航海中の様子を一通り聞かうち、三条太政大臣・西郷・川村来る。ハーブルへ行き眼鏡一個を買う。代金四円也。17時15分発の列車で帰京。
- 19日 工部省に出頭。松方が省へ帰り、井上と器械所等の件につき種々談判する。印鑑が出来、代金四円五〇銭。理髪に行き代金五〇銭。夜、杉の茶室新築のため招待される。隣農舎で遊ぶ予定が雨で中止。伊地知恒庵と正治を訪ねる。宮島も後から来る。午後、水交社に行く。鍋島直彬氏を訪問、土方・山口も来る。大山の子供本日お七夜で家内中招待されているので、帰途立ち寄る。22時清水が来て、河瀬暴談の件を聞き、明朝松方に話すことを約す。
- 21日 工部・宮内両省に出頭。副島・伊地知宮内省御用係を拜

命する。副島は侍講を兼務。午後、正治・宮島・石井省一郎来る。朝、松方へ行き、新燧社株金の件を話す。ペールの晩餐に招かれ、山田頭義・河村・中井・原田・三浦等同席。

22日 医学校開業式につき臨幸。工部省に出頭。家族一同で隣農舎へ行く。帰途袖ヶ崎へ参上し、内田に面会。それから松方へ行くが不在。川村へ行き食事後戯球。平岡から25日に永田町の家を引き渡して欲しいとの連絡が来る。

23日 7時15分発の列車で横浜の鎮守府へ出張。扶桑艦に乗り、猿島へ向け標的の発砲あり。ドイツ軍艦のカピタンと士官一人、ベール、クルップ手代の者が来艦、艦中で食事後16時の汽車で帰る。

24日 工部省・宮内省へ出頭。天顔を拝し晴雨器購入の件並びに末松謙澄から献呈の欧州事情を差し上げる。今夕、松方に行き伊地知正治・石井省・山田寅等来る。農業家船津も来、農事の話聞く。

25日 永田町の家を仮に受け取る平岡と一緒に赴き、掃除する。宮内省に出頭。夜、御内儀に伺候し縮緬一反、煙管、煙草入れ、お菓子を頂戴する。副島・伊地知は勅命により出仕する旨皇后宮に詳しく申し上げる。井上大佐が御前で航海中の事情について申し上げる。

26日 今日、邸宅の掃除をさせる。幸蔵来る。

27日 幸蔵・良熊等来る。

28日 宮中に出仕。

29日 工部省に出頭、井上に同人の留守中のことについて話し

ておく。午後、宮中で両大臣に侍講の件につき建言する。

30日 本日、永田町二丁目一五番地に移住する。井上、昨夕から出発。副島・大山・中井等来る。梅田・山下七之介等来る。大工職人等に祝い酒、ソバ等を振る舞う。鍋島の送別会あるも辞退して行かず。税所より畑中の上京につき連絡があったので返事を出す。今日、区務所にて永田町邸宅の授受を済ませる。此方より梅田、毛利家より竹下の立ち会いであった。

5月1日 工部省に出頭。晩景に五代へ行く。伊藤参議・森・吉田等と棋会。留守に高島権蔵の妻が反物一反を持参したという。

2日 内閣に赴き、伊藤に面会しビートンの給料の件について話し、また油・石炭・海底電線注文の件について大蔵卿に話してくれるよう頼む。宮内省で副島の件は当人と委細相談、何も異存ない旨一同に話す。正治の倦みたる様子については注意を喚起してくれるよう話す。雄介が三井銀行より五千円を受け取る。永田町の地券の書き換えが済む。今夕、本田へ牡丹を見に行く。両伊地知・木場・児玉・鮫島等同席する。留守に森・大山が来た由。

3日 宮内省・工部省へ出頭。ビートン昇給の件本日決定。米吉戸越へ行く。今夜、イタリア公使の晩餐に招かれ大隈・西郷夫婦・ロシア、ドイツの代理公使等出席。

4日 幸蔵・鎮武等来る。午後から争玉軒へ行く。七之介を鹿兒島へ遣わし、旅費として五十円渡す。

5日 工部省へ出頭。今夜の伺候は断ってくれるよう土方に頼

み、親睦宴会の歌を渡す。

親睦宴会に石川誠をおもふ

永らへて今日の円居に君しあらば

嬉しきことの限りならまし

今日祭礼を行い且つ節句祝い、移転祝いを兼ねる。来客は宮島・伊地知恒庵・岸良彦・高崎・石井・邦猷・木場等。芸人の和佐之助を呼ぶ。本田は先に帰る。正治も昨日あたり青山に移ったという。

6日 工部省に出仕し、ピートンの給料の件で談判する。少々相違の廉があつて延引する。鍋島に暇乞いに行く。

親睦宴会の序並びに歌

いかにして筑紫の海による波の

千重のひと重も君にこたへぬ

こは三条実美の君の筑紫におはせし頃石川誠もて友実
に送り給ひしうたなりけり。かくてその後めでたく都
に帰り登らせ給ひ幾重の君にこたへつつ、十とせ余り
をへて今年明治十二の春、その折の人々と深川の里な
る親睦園に、酒汲み歌よみなど打ち興じ、あるは過し
心尽くしのことも思ひ出で給ふらんと押はかられぬ。
友実もうたげにつらなりてその歌のこと思ひ出してよ
める

君がため心つくしの波間にも

くだけぬ玉のけふの盃

7日 宮内省へ出仕。平岡と謁見。岩倉公からアメリカ人の燐
質石塊発見の建白書と大久保利通祭事の件を聞く。岩倉

公と御前に伺候する。天皇より、政府は公平にして平均
の処置を取るべきこと、教育は大切で現在の風潮は何事
も西洋流に傾いているのは遺憾であり、日本の国体を立
てるようにすべきである。例えば西洋人が論語は良い本
であると言えば忽ち読み、逆に悪い本だと言えば捨てて
省みないのは恰も流行の稲荷に愚夫愚婦が参詣するが如
しと仰せられる。午後から青山南町二丁目四十九番地正
治邸を訪問。

8日 工部省へ出頭。午後から隣農舎へ行く。梅田・帖佐も来
る。新吉、放免されて帰る。税所から出京の書状が来る。

9日 宮内省へ出頭。伊地知も参内。四谷禁苑総裁に任じられ
る。横浜行きの旅費十三円受領。午後から水交社へ行き

会議。夜、清水来る。宮島来て、司法省の話を聞く。

10日 工部省へ出頭。本日上野精養軒で土方の餞別会あり。

11日 五代を同伴して新燦社へ行く。16時頃伊地知正治・松方・

笠野来る。幸蔵・鎮武など来る。家屋の代金受取書を安
川に渡す。

12日 工部省へ出頭。井上、馬関に到着の電報が来る。本田へ

行くも不在。伊貞へ行き、唐紙代三円を払う。今夕、岩
倉公の食事に招かれる。大久保利通の祭事のためで、同
県人のみ二十余人来会。大久保に一周祭の花代二円五十

錢を送る。

13日 大原殿へ行き十六日の吹聴を間違え今朝行く。香花料二

円五十銭送る。土方が明日より出発するので暇乞いに行
く。岡部に一封遣わす。水交社へ行く。夜、御内儀へ伺

候し開拓使より献上の襟巻き、手拭いなどを頂戴する。
正治が歌二首を御覧に入れる。

皇居御造営の事を聞きて読める
真木柱ふとしきたてて四の海

よりてつかへむ大宮所
宮内省御用掛拜命の時よめる
山里に生ひしわが身も思ひきや

大宮人の数ならぬとは
応挙の美人画、正倉院の御剣の写し等拝見。

14日 七之介昨夜、鹿兒島到着の電報あり。大久保の一周年祭につき午後から青山墓所に行き、夜、大久保宅で食事。

15日 今朝、税所来る。参朝、天皇より皇居の絵図面を頂戴するもこれを太政大臣に託す。夜、五代に招かれて川崎の家に行く。

16日 税所と同道で正治宅へ行く。今夕、大山宅での三十日祝いに付き行く。和佐之介来る。

17日 転宅披露のため夜、伊藤参議・伊地知正治・税所・大山・中井・宮島・松田等を招く。

18日 本阿弥平十郎へ行き、上野の精進料理で午餐。根岸の辺りを徘徊し、吉原を通過して橋場の町田を訪問。帰路船で新栄橋に行き、五代に立ち寄り帰宅。

19日 目黒の西郷別荘に招かれ盛宴なり。あいにく雨。

20日 税所と同道して、副島・ヌベールを訪問。両国の柏屋に行く。開拓使産物の料理開きなり。何れも好味。

21日 西郷・川村が税所に暇乞いとしてくる。夕方、副島が来

て税所への贈詩。夕刻、御内儀へ伺候、御菓子を頂戴し、副島・本願寺の話あり。

22日 税所、東京丸にて帰県につき横浜まで送る。ハーブルに立ち寄り晴雨計の注文をする。帰路、車中で成島柳北・篠原順明等に面会する。今夕、宮島へ行き下条某に会う。画に鑑識ある人という。

23日 宮島今日から伊香保温泉に遊浴。

24日 ハーブルが晴雨計を持参したので宮内省へ同道する。正午、陪食を仰せつかる。同席は東伏見宮・伏見宮・三条殿・大木・寺島等。ベールから献上の扶桑艦（雛形カー）の原注がある）を御覧になる。夜、ベールへ晚餐に行く。夜、七之介帰京。野津・大脇より書状来る。用件は全て済みとのこと。

25日 今夕、松方にて宴会あり、西郷・大山・川村・大隈等来る。税所から預かった書状を渡す。ドイツの名医ベルツに幸蔵の診察を依頼し異常なしと聞き、安心する。大給・九鬼来訪、博愛社に加入の件頼みおく。

26日 税所から帰県の手紙来る。野津・大脇へ手紙だす。

27日 ベールが来訪し、海軍軍楽隊を公使館に拝借する間、宮内省から天幕を借りて欲しい旨を頼まれる。

28日 ドイツの皇孫来着。皇后宮の御誕生につき酒肴を賜る。天幕一張ドイツ公使館へ貸し出しの件桜井に連絡する。後藤象次（二）郎来訪。

29日 ドイツ皇孫を延遠館に訪ね、帰路水交社に行く。皇孫参内。

- 30日 井上帰京、土産に茶を貰う。薩州福昌寺住職断泥、琴平神社の某が来る。福昌寺は本堂建立の依頼なり。松田・岡部碁打ちに来る。聖上、ドイツ皇孫を延遠館に訪問。伊地知正治から明日八百勘楼で宴会を開くとの連絡あり。このところ雨続きで憂鬱なり。
- 31日 伊予の人某板垣退助を暗殺せんと謀るが露見した旨日々新聞にあり。正治の八百勘楼での宴会に行く。本田・松方等同席。6月1日 風邪・腰痛のため今日より五日まで引きこもる。
- 6日 今日より出仕。皇后宮民間の苦しみのお話色々あり。御幼少の折、お里の一条家が焼失したため岡崎別荘へお住まいになられた折、毎朝近辺の百姓どもが難儀している様子を御覧になった話をなさる。
- 7日 幸蔵来る。
- 8日 岡部・林他一人を連れて隣農舎へ行き終日遊ぶ。
- 12日 謁見所の設計図の修正案を天皇にお目に掛ける。横浜町会所の夜会に招かれ○時の汽車で帰る。
- 13日 今夕、御内儀へ伺候。フランス公使が帰国の際寺島に「日本人は敏捷であるからドイツ辺りへ遊学した方が良い。支那人は鈍姓（性）であるからアメリカへ遊学した方が良い。両国の学校には大きな違いがあるから。」と言ったという。
- 14日 荒川巳治と正治を訪ね、正治から依頼されていたサーベルが出来たので持って行く。以来、天皇の御即位・御婚
- 15日 石井省一郎来訪。玉屋へ行く、大山・村田・仏人二人来る。
- 16日 香港知事ヘンネンシー今日から箱根、西京、大阪辺へ歴遊し、井上・松方が同行するので朝、新橋まで送りに行く。太政官から木盃一個拝領。これは水交社から病院へ差し出した褒美である（驚——何を差し出したかは不明）。内閣へ出頭し皇居の場所・謁見所の件を申し上げ聞き届けられる。午後、水交社へ行く。
- 17日 工部省へ出仕。午後、水交社へ行く。宮島伊香保より帰る。
- 18日 石原が来て、おゆうに公債証書の件で談合あり。菅野が来て、大一郎の送籍の件は暫く見合わせるとの相談あり。卯三郎来訪し、ヘボン英和辞書買い上げの相談あり。工部省へ出仕し原田宗介から帰京の話聞く。宮内省へ出頭し謁見所の移転並びに西丸、本丸の間の場所を決定して欲しい旨の書類を右大臣殿に提出する。佐々木侍補来訪、徴兵令の見込みにつき報告せよとお話あるも、明朝申し上げる旨約す。ロシア人横浜から逃亡したのとこの連絡あり。西郷・大山・野津・樺山等と向島の小野某方へ刀を見に行く。
- 19日 8時伊藤参議の許へ行き、ロシア公使からの電報について相談する。工部省に出て石井に外務省への返事を連絡

する。10時宮内省へ行き、11時右大臣に面会し、西京御所に於いての御大礼の際の件等につき建言。13時御前に出て佐々木と共に徴兵令についての御下問にお答えする。工部省へ出頭し、14時からイタリア人ダクサ宅に行き面会し、大久保利通の像を見る。帰途水交社へ行く。大阪からコレラ蔓延の電報が来る。山尾等帰京。

20日 朝、林賢徳・林次・宮島等来る。宮内省へ出頭。工部省で山尾に面会し留守中の件につき相談する。夜、ベール宅の晩餐に招かれ、黒田・西郷・大山等同席。黒田から笠野熊吉コレラで死亡と聞く。大阪の松方から電報で井上に連絡があり、病勢が甚だしきためよくよく勘考すべしとのこと。

21日 井上、横浜着の電報来る。今夕、正治宅へ宮島・伊地知恒庵と同行する。

22日 幸藏・鎮武等来る。午後から井上宅を訪ね、細君に面会し大阪はコレラの大流行につき、明日帰京するという。帰途水交社へ行き晩餐。22時頃帰宅。

23日 本日海軍艦隊の操練を大覧予定のところ雨で延期。三条・岩倉両大臣より徳大寺・佐々木・自分等に対し内密の談合あり。

24日 副島から天国の剣献上の取り次ぎを依頼され、確認したところ納めるとの返事を貰う。副島は直ちに献上した由。宮島を訪ね、天神の夜市を見る。工部省へ出頭、午後水交社へ行く。

26日 佐々木と共に両大臣に教育令の件を建言する。本日、両

大臣から重大の事件懇々切々に言上したところ、いずれ御返事なさるとの由。本日二度ほど下痢する。

27日 8時に天皇が戸山学校へ臨幸するのにお供をする。昨日の下痢で衰弱していたため昼までで暇を貰って帰宅し、午睡。雷雨甚し。夜、清水来る。

28日 朝、平岡が来てその車に同乗して西の丸の縄張りを検分する。11時から参朝し陪食を命じられ、紹一反・袴地一反拝領。熊太郎、不埒の所業があったので暇を遣る。公債証書の利子四十九円七十銭を受け取る。

29日 松田と隣農舎へ行き、大島と出会い同道して川崎屋で午餐。本日、先考の正忌日なので祭典を行う。夜、松田が来て囲碁。

30日 工部省へ出仕し、水交社へ行く。帰途、大山宅へ寄る。7月1日 杉と同道で大蔵省へ出頭し、大隈に引き合わせて御造營の金額の談判に及ぶ。それから新燧社へ行き、河瀬・鈴木・関口等も来る。器械製造着手のことに決定する。帰途理髪する。17時、大山邸新築の基礎の式あり。夜、大山邸の祝宴にフランス人デスカスも来る。

2日 工部省へ出仕。夜、岩下・宮島と同道で正治を訪う。

3日 西丸へ行き、地底測量を見る。今日公債証書一万(四字分空白)を貰う。栄吉が受け取りに行き、五月渡し分の利子二百八十二円も貰う。

6日 朝、井上に面会し建築の件につき談合。午後、警視射的会に行く。グラント・岩倉公等も来る。帰途万代軒で食事。

7日 天皇8時30分の出発で飾隊式を見、グラントも来る。芝

離宮で午餐を賜り、グラント夫婦と握手。その他香港知事・グラントの倅等には握手はなくその御様子に甚だ感服する。今日は常にお側におり、車中での言葉に西京御所の不用の部分は大臣・参議の官舎用に用いてよろしいとの話がある、真に有り難きことなり。本日仲介誕生し、宮島に連絡し共に晚餐する。岡部も来る。

8日 今日東京府民よりグラントのために工部大学校で夜会を催す。その歓待振りは丁寧にして盛会なり。高崎正風来訪、野津より聞き及んでいた話がある。

9日 横浜町会所でグラントの為の夜会があり出席する。

11日 工部省へ出仕。水交社へ行く。安田へ行き、新燧社拝借の件につき談合。

12日 宮内省へ出仕。徳大寺卿に面会し、正治の徴兵令の御下問につき談合。グラント拝謁の件は内密にするのが良いであろうと言上。遠武が来たので同道して富士見軒に行き晚餐。そこから川開きに行くが雑踏甚だしく、22時より強い雨が降り始め帽子を買って帰る。

13日 黒田へ行き、新燧社拝借の件につき相談する。帰途、石井邦猷に立ち寄り、水交社へ行く。夜、両伊地知・宮島・本田来る。清水が来て安田への紹介を頼まれる。七之介来る。

14日 グラント氏工部大学校に来て12時に帰る。

15日 午後から両伊地知・本田・宮島等と二子に行き亀屋に止宿。夕食後、溝の口の辺りを散歩する。帰って詩歌書画

等の興あり。この地幽勝にして世塵を離れるの思いあり。

玉川の清き流れに世の中の

あれらこれらもわすれはてけり

この頃コレラが流行し殊に上方は甚だしい。

16日 朝、漁師五人を雇い鮎をとる。別に小舟を出し、酒肴を乗せて川に浮かぶ楽しみは無限なり。

玉川の河瀬河瀬に鮎とると

網引きかけて乱れたるみゆ

12時、宿に帰り一睡する。15時25分帰途につく。92時30分かかって家に帰る。費用は九十三円。今夜、新富座の芝居をグラント等と見る。芸妓の伊勢音頭踊りが実に見事であった。○時に帰宅。

17日 皇太后宮が伊香保へ出発につき門外まで見送る。幸蔵も今朝5時の馬車で同地に行く。税所から来簡。

18日 井上宅へ行き午餐。君側の模様・皇居造営の件等につき談合。そこから川村へ行き、椎原氏に面会する。今夜、伊地知恒庵宅へ行く、正治・本田・宮島等来る。鹿児島へ手紙を出す。

19日 陪食に預かり、同席は有栖川宮・三条殿・井上・黒田・川村等。新殿を拝見する。水交社へ行く。今夜、ベールの夜食に招かれて行く。品川は不快なりと言う地質学者も来会す。明後日10時に出頭せよとの太政官の命あり。

20日 安田定則が来て犬追物の話あり。木場・山城来る。山城に水道の件を頼む。

21日 宮内省に出仕。岩倉殿に島津家の犬追物天覧の件につき

相談する。

22日 工部卿と御前に伺候。御造営については費用は気にせず堅牢を第一にして欲しいと言上しご承諾を得る。西丸天覧の件について申し上げたところ、来る24日9時に出発と決定。

23日 宮内省に出頭し、明日西丸に行幸の件につき、卿・輔と打ち合わせる。工部省に出頭し、山尾・平岡にも出頭の連絡をする。

24日 西丸に先着し9時過ぎに御到着。岩倉殿も出頭し、繩張りの様子を天覧後滝見茶屋で午餐。岩倉・井上・徳大寺・杉・山尾等陪食。今夕、椎原・児玉・本田・両伊地知等来訪、書画揮毫のことあり。宮島の病氣を見舞いに行く。平岡と内務省に出頭し、林少輔に紹介し木材の談判をする。帰途得能に立ち寄り、勸工場へ行き、掛け物掛け一本、泡盛、猪口五個を買う。

26日 工部省へ出仕。明日出発の旅費を受け取る。宮内省へ出仕し、平尾に明後日から出張のこと及び皇城建築報告の件を依頼する。樺山から報告のあった熊本鎮台記念碑の件を卿輔に申し入れてくれるよう桜井に頼む。水交社へ行き、社費を払い石井省に面会する。佐野から晚餐に招かれて行く、副島・高崎等も来る。

27日 正治から明日出発の連絡が来る。清水が来て今日渋沢・増田来社と聞く。益満・樺山来る。橋本正人から新町宿手当等の儀一封来る。

28日 5時に出発し、正治・遠武と6時30分の列車に乗る。正

治が戸田川近辺で下痢がひどく蔵宿から引き返す。遠武と二人で鴻巣で午餐。薄暮新町に到着し鉾山の定宿に一泊。夜、本田・伊地知恒庵に手紙を出す。

29日 新町製糸所を見学、盛大な器械なり。10時、同所を出発し吉井駅で午餐。富岡へ到着後休息。遠武はまた製糸所を見学するが余は先に出発して下仁田に着き杉浦に泊まる。程なく遠武・栄吉来る。

30日 朝、原田宗介・高橋某が来、同伴して中小坂鉾山分局へ登る。坑内に入り見学するに実に広大な鉄鉾所で、事務所で午餐。午後、旅館に帰る。夜、原田など来る。今夕、幸蔵・伊藤某伊香保から来る。

31日 遠武と同伴で妙義山に馬で登る。山頂に大国主神を祭る。奇岩怪石眺望絶佳、真に妙義の名に恥じず。薄暮、下仁田に帰る。石井が来ており、幸蔵は伊香保へ帰る。

8月1日 朝、遠武は伊香保へ登り、余は石井・原田等と川筋・道路を検分し、南蛇井で原田等と別れ、富岡で午餐。高崎へ出て薄暮、前橋へ着き紙屋に一泊。明日、皇太后宮還啓のため市中は混雑。岸良大書記官に面会し道路などの件につき話す。

2日 10時頃から町役人の案内で皇太后宮御休息所に表敬訪問し、県令にも面会。午後から伊香保へ登り、暮前木暮八郎方へ到着し、遠武に会う。幸蔵も来る。

3日 朝、遠武は日光に行き、余は昼から島田平八郎方へ変わる。三国峠から小野子山、子持山等が遠からず、また近からず真に仙境にあるが如し。伊藤博文が揮毫した嘯雲

楼に入る。小森沢に面会する。

4日 小森沢と向山へ納涼に行く。伊正より来簡。

5日 小森沢・下条等と終日向山に遊ぶ。大久保・春野が来て明朝帰るといふ。

6日 16時一人で二嶽に登り、野の花数種を摘んで帰る。

心して見れば名も無き秋草の

花の色香もなつかしきかな

夜、今井来る。

9月14日 宮島・本田・伊恒等と木母寺・植半楼に遊ぶ。栗香・梅塘、詩あり、余にも作れとのことで

両岸垂楊水色清

閑亭回首暮雲晴

秋波深処紅塵遠

半日閑遊棋子声

24日 西郷南洲の忌日なので両伊地知・本田・木場・宮島等を

招き祭事を営む。正治花を持ち遣わすとて

色深き秋の七草折々に

しのぶも露の昔なりけり

余もまた過ぎにしことども色々思ひ出して

もしあらば共にゆかむと誓ひてし

人はむかしになりにけるかな

栗香・梅塘・恒庵・木場に各々詩あり

25日 今夜、御内儀へ伺候。徳大寺卿へ参朝し西京よりお取り寄せの御掛け物拝見する。冬瓜の大なるを拝領。昨日作った西郷を思ふ歌をお目に掛ける

26日 水交社からペールへ行く。

27日 千住の羅紗織器械所開業式に行き真に愉快なり。帰途、上野辺を散歩し、精養軒で16寺から副島・伊地知・佐々木・元田・土方等と会食。

28日 午後から武熊・寅治を連れて隣農舎へ行く。戸越八幡の祭礼につき参詣する。この間から幸蔵が来ていて柿栗等を取る。

29日 栗香と同伴で青山の伊地知へ行き帝室御取調の件につき談合する。天皇から芝離宮の池で取れたという鱷一尾を贈られる。

30日 夜、中秋の月を見に芝浦へ行く。

本田の歌
大御代は染しかりけり時は秋
昔の友の円居し居れば

幸蔵今日から学校へ帰る。

10月1日 工部省から帰途、水交社へ行く。

2日 岩倉家の宴会に招かれ参議・議官など数十人。帰途、番町の米花亭への書画会に出席する。催主は本田で、池原・大所・重野・高崎などで竹の画を描く。

3日 関口忠篤が上海、香港へ派遣されるにつき暇乞いに来る。

本田親雄が共立商社の金を持参。

4日 朝、9時から千住製絨所見物に行く。岸良老・両伊地知同伴にて羅紗二着分を買う。千住魚徳で午餐。14時頃から軽舟に乗り日本橋まで下る。得能に立ち寄り話して帰る。

- 5日 幸藏・鎮武等来る。鎮武は明日から習志野野営に赴くといふ。午後から新燵社に行き、清水を訪ねる。共立商社へ立ち寄り、規則書を貰う。本田・高崎・伊恒・岸良等の入社金百二十五円を渡す。帰途、神田の万代軒へ行き晚餐、戯球する。陸原氏も来る。前田正之がフランスから帰国の挨拶に来たので昼飯を饗し、大久保利和・牧野・大島等も同席。
- 6日 宮内省へ出仕し、西下の件を山田に交渉するが、今一船延ばせとのこととなる。夜、御内儀へ伺候。池田氏献上の花瓶を拝見する。元老院への臨幸は明後日とのこと。皇后宮より先夜の歌大変面白かった旨楓（教子）から話があり、南瓜一つ頂戴する。
- 7日 今日、西京・大阪・敦賀・生野等へ出張を命じられ、旅費三百八十円を受領。
- 15日 11時発の汽車で横浜に行く。清水・幸藏・勘兵衛等見送りに来る。属官児玉少介は先に出発。今村へ上がり午餐し、膝掛け・皮一枚を買う。15時亥海丸に乗る。陸軍検閲使野津・三浦、その他数人同船。上等客は四十余人、大阪新報記者関新吾、造船家平野富次等も同船。17時出帆。
- 17日 8時神戸着。長門屋へ上がる。税所・盛岡来て話す。工作分局へ行き諸処を検分し、外国人保険の報告を同所の属吏に渡す。12時20分神戸発の列車で大阪へ行き井上に鉄道の件で談合。同車して西京へ赴き、停車場に営繕局属官大野某が出迎え、薄暮、木屋町池庄に止宿。杉・平岡等来る。
- 18日 朝、横村来る。9時から御所を拝見し、昼に宿に戻る。16時四条を散歩。夕刻、税所来る。夕飯後また四条を散歩する。一力から迎えが来る。
- 19日 三景楼で午餐。蔵六・文石堂・鳩居堂へ行く。富岡鉄齋・岡部・畑中・林等来る。人形師幸右工門作のお福を買う。森岡上京。
- 20日 桂御所の見学に行く。税所・森岡・平岡・児玉・大野等同行する。桂川端で午餐。15時頃まで見学、古雅極まれり。夜、森岡帰京する。富岡来る。鳩居堂も来る。
- 21日 税所・富岡と同道で9時10分発の列車で下坂し、畑中に投宿。税所・富岡は堺に帰る。馬琴の紀行一部を書店で求める。山中吉兵衛で水差し、清水堂用物焼物を買って二個で七円五十銭。後藤で十六羅漢赴斎一巻を四円五十銭で買う。夜、栄次郎来る。
- 22日 山中で書画を見る、宋高宋の書なり。堺に行く途中、東呉楼で鰻を食う。ここまで為介・与兵衛同行する。14時頃天神に到着し、市川村で刀を見る。晩景、潮湯に行き今夜別荘に一泊。杉から来簡。
- 23日 9時前に堺を出て住吉を参詣し、10時に畑中へ帰り、15時過ぎの列車で西京へ帰る。
- 24日 今朝、岩倉殿京都に着き、東本願寺に泊。杉等と訪問し直ちに帰る。途中、丹羽宗明に会う。午後から栄吉を連れ、下加茂に参詣する。そこから上御霊・北野に参詣。夕景中路へ行き、浅草海苔・寿司・酒代一円を送る。老

25日 婆の喜びはひとかたでない。丹羽も来る。山田へ送信。7時から御所へ出頭。岩倉公も来られ全て決定する。副島事件、大臣辞表のお話あり。午後から丹羽中路と三条橋を渡り、南禅寺から吉田に出、三本木清暉楼に登り飲む。恰も旧暦9月10日にして月東山の上に出て真に閑静、身は世外にあるが如し。談笑中に南洲・甲東のことに及び、また警視局藤田等の話を聞く。丹羽曰く今宵の景色を歌に読むべし、予は詩を賦せんという。

秋の半ば頃三樹の清暉楼に登りて

鴨川の月に昔を偲びつつ

語らふかげに千鳥鳴くなり

この辺りに山陽・星巖等住みし所なりければ

心ある人の住みける鴨川の

あとなつかしみ誰か問ふらん

26日 今日もまた御所へ出頭し、種々評議。午餐後、金閣寺に赴く。中路・丹羽他に三名同道し、名書画を見る。探幽の三幅対を金三円で買う。住職が酒飯を饗するにより二円を与える。帰途、春日讃州を訪ねる。息子を仲淵という、平凡なり。薄暮、散歩して帰る。滋賀県大書記官酒井来る。鉄道の見込みについて聞きに来たといひ、米原塩津の敷設よりは米原大垣の間九里半の方が遙かに良いとのことであるが、尤もと思う。岡部大阪より来る。岩倉公より菓子一箱貰う。

27日 女学校織物所・染殿等を見る。ワグネルに面会する。綿種でシャボンを作り粕は肥料に用いて、不要品を役立て

る工夫をした由。午餐後、岡部と清水に参詣して幹山で陶器を買う。16時岩倉公の旅館を訪ねて、密話あり。今夕、税所・松村判事来る。

28日 8時に出て、伏見御香の宮に詣る。京都府博物館の佐々間雲巖が同行し名所旧跡に詳しく社内名水が湧き出るので御香の宮があるという。昔明治元年の初戦に予もここに出張したことを思い出す。この社を我が陣営の手に収め、敵を眼下にしたのでついに勝利を得たことなどを税所・児玉に話す。児玉は歴史を編纂するの企てがあるので大いに参考になったという。それから伏見製作所を見、宇治の方碧楼に投宿。黄檗山に登ってから午餐。平等院に行く、堂宇真に古雅あり。宇治の閑白の別業を寺にしたと言うが、今から九百余年の昔である。橋寺に至る。興聖寺に詣る。夜、1時まで話す。上林三入から茶を買う。

29日 8時に出発して奈良に行く。税所は篠塚を連れて昨日から先発。奈良坂に区長が出迎え、般若寺に案内される。税所の家に着し午餐の後骨董店を回った。同行者は皆武蔵野に宿泊。

30日 平岡・大野は春日山で立木を検分し他では見られない程の大樹があるという。午後東大寺・博物館に行き、珍物甚だ多し。

31日 朝、武蔵野に行き平岡を誘い、手向山八幡宮・正倉院のお蔵を拝観。景清門を出て松利という割烹店で午餐。午後から税所・平岡と秋篠寺・西大寺に行く。名水があり

西行の

秋篠の外山の里やしぐるらん

生駒高嶺に雲ぞかかれる

とよまれた外山の里は今は中山という由。西大寺では種々の什物を見る。呉州焼の大茶碗があつて十八個揃つていとよい、有名な物という。税所の家に戻る。帰路によんだ歌二首

大和路を今日越え行けば秋篠や

生駒高嶺に時雨降るみゆ

今日時雨そめたり

古の奈良の都はふりぬれど

なほすまばやと思ひけるかな

今日道すがら古の御所の跡のあたり風景いはんかたなし。夜富岡鉄斎・池田等来る。

11月1日

早朝、奈良を出て正(唐招)提寺・薬師寺を見る。薬師の像古色を帯び名作なり。法隆寺宮御殿で午餐後、諸処を拝観する。太子の像は眼光射るが如く、威令赫々たり。15時頃寺を出て薄暮堺につき天神に泊まる。

2日

休息。市村に行き一泊。

3日

吉田・平岡等と多川村尾焼場を検分するために出発し、薄暮到着。天長節なので夜、児玉に酒肴を振る舞う。

4日

早朝多川を出て堺へ帰る。途中佐野駅覚平で午餐。気分が悪く一睡して漸く市村へ帰る。富岡が来て画と歌をか

5日

午後から大阪へ行き、西照庵に一泊。今朝児玉来る。

6日

石丸の案内で造幣局を見る。本日、市中數十戸焼失。午後山中吉兵衛に行き骨董を見る。夜、大賀某が龍吉他一人の老妓を連れてくる。野津も来る。

7日

今朝から生野へ行く。神戸で森岡が待っていて、直ちに車をとばして舞子で午餐、日暮れに姫路に着き井上樓に投宿する。すこぶる大店なり。

8日

姫路を出て15時頃生野へ着く。朝倉が来る。茶を飲んでから器械所・坑内を見る。夜に入ってから宿に戻る。

9日

朝6時に出て神児畑へ向かう。山口で休憩しそこからは籠で二里ばかり行き、神児畑村へ着く。険阻を登りすこぶる難儀して山上に着く。午餐後、漸く山を下り、薄暮生野に帰る。入浴後、ムーセ宅に行き晚餐の饗応を受ける。今日鹿一頭を買い。値段は一円二十五銭なり。

10日

9時生野を出発して姫路で午餐。森岡に会い同道して神戸光村到着。21時なり。

11日

京都に行く。

12日

朝倉・児玉同伴で岩倉殿の旅館に参上。外務卿からの書簡を見る。

13日

税所・朝倉・佐々木と山鼻から脩学寺御茶や・詩仙堂辺を歩き帰途大徳寺により薄暮帰宿。

14日

祇園山を見る。朝倉・税所は各所に帰る。岩倉殿から明日大津行き連絡を受ける。大阪より井上勝来る。

15日

岩倉公初め一同は朝八時発の列車で大津へ行く。播磨屋で午餐。そこから蒸気船江州丸で坂本に行き、延歴寺で休憩。住職が酒肴を出し岩倉公は今夕帰京、予は大津繁

栄楼に一泊。夜酒井大書記官・七里属来る。

16日 朝蒸気船で敦賀に行く。湖上の風景最も愛すべし。

叡山楓葉映湖秋

一片帆影随風流

此夕思不携佳人

孤身飄々下越州

16時頃塩津につき、人力車に乗って敦賀に向かう。悪路にして泥濘限りなく、20時敦賀に着く。三井銀行支店に泊。滋賀の箆手田県令も同宿。

17日 鉄道測量方長谷川某の案内で金ヶ崎から松原辺を検分す

る。午後から車で柳ヶ瀬に出て北陸道(二字空白)に泊まる。有名な地藏堂がある。今日賤ヶ岳・余吾の湖を見る。

19日 早朝に洋犬の曳く人力車に乗る。幾千金の値で買ったといふ。米原から蒸気船に乗り彦根に着き、城山を見る。

旧知事の別荘に休息し、製糸所を見る。夜、越智川に泊まる。

20日 昼、大津に着き午餐。酒井大書記官来る。京都に帰る。

21日 大阪に下る。

22日 税所が奈良にいと聞き、車をとばして奈良に向かう途中、国府越えで出会う。同人は堺へ帰る所なので一緒に堺へ行く。

23日 堺に遊ぶ。

24日 大阪へ行く。

25日 飛脚船に乗り、税所とは大阪で別れる。おすがさん・次郎同伴児玉もここで別れる。船中極めて穏やかなり。

27日 未明横浜着。小林に上がり直ちに帰る。寅新橋まで出迎える。此行四十三日で帰る。

12月22日 公債の利息八分は鹿児島県で支給され、二分は本日東京府より支給され帖佐が受け取って来る。金三百四十二円三十七銭五厘なり。

(以上「三」から)

明治一三(1880)年

1月1日 7時30分に参内し、8時に聖上・皇后に賀正。9時青山

御所に参賀し、大后に拝謁。番町・飯田町辺から両大臣に年賀し、12時に帰宅。午後築地から麻布辺に回礼し、薄暮に帰宅。

2日 午前閑居の試筆。

御園生の松吹風の静けさに

たつか音高し君が代の春

午後、木場と同道して島津家へ参上。出がけに日枝神社に参拝し、帰途松方に立ち寄るが不在。岡部勘紫檀台を買ってくる。夜雨。

3日 駿河台辺を回礼し、帰途木場へ立ち寄り、岩下・伊恒など居合わせ今年始めて顔を合わす。雨上がる。木場の内室から正月酒の作り方を伝授される。

4日 水交社の初会合に出席する。投票で監事になる。幸蔵の友人に振る舞う。馬車を買う。代金は二百二十円、但し

これまでの馬車を下取りにだし、金百二十円を払う約束をする。芳川顕正が昨日帰朝し、本日来訪。ロシア・プロイセンの葛藤いよいよ甚だしく、また支那と日本との紛糾につきロシア・プロイセン・イギリスより軍艦をアジア海へ派遣したのは間違いないとの由。またロシア皇帝・スペイン王を暗殺しようとして企てたる電報が着いている由。

5日 工部省に出仕。新年宴会に参朝し聖上より酒肴を賜る。夜、本田・宮島・伊地知恒庵・木場・天湊等を招いて始めての会合を開く。

6日 工部省に出仕し、午後水交社へ行く。夜、上野の夜会は不参。前庭の竹垣を繕う。今日寒の入りで昨今寒冷甚だしい。竹下清右衛門来る。

7日 例の刻に出仕し、午後芳川・柳原等を訪ねる。夜西郷を訪問。山田某来る。順聖公の御社へ御剣下賜の一件なり。

8日 聖上が陸軍初めにつき、日谷練兵場へ臨幸。佐野から午餐に招かれ土方と行き、16時頃まで話す。話は皇族御苑行きの件・皇居造営のことなどに及ぶ。夜、富士見亭で晚餐、戯球。宮島来る。西郷南洲・大久保甲東の書牘を久鬼に送る。

9日 皇后の御造営地の見学を案内し、午後出仕。夜、青山の柳を訪ね、大阪の音談を聞く。時計を掛ける。

10日 今朝税所から手紙が来て文中に海辺一塊を生ずるの語があり、直ちに返書を出す。午後、新燈社へ行きそこから清水を訪ね、昨夜の男子出生を祝う。帰途壺岸島の大黒

屋で鰻を食い、通町で算盤を買う。新橋際の楼で石井・芦沢と戯球。金比羅市へ行き22時過ぎ帰る。今日大丸に行き、袴地と海氣を買う。前田正名から13日の招待状が来る。

11日 恒庵・栗香・岡部と臨農舎に遊び、列車で帰る。児玉少介氏から豚と鶏一羽来る。

12日 午後、宮島の案内で清国公使何如璋・黄蘧憲を訪問。税所篤三通学の議を頼む。竹添信一旧冬24日帰国とのこと。来訪し、清国は異常なしと。

13日 椎原・竹下・有川・種子島等と赤羽へ米搗器械を検分に行き、八分で仕上げののに驚く。午後常盤橋で理髪。夜、前田正名方で食事。

14日 西京御所保存の件につき岩倉殿・徳大寺・杉・土方等と御所へ伺候し、旧冬検分の次第を逐一言上する。夜土方・元田・宮島・高崎・池原香雅等来て、書画の興あり。清国公使何如璋・通弁官が来て、談話久し。清では天子は常に椅子に座り、宮殿の壁は石・煉瓦等を用いるという。篤三が今日宮島同伴で黄蘧憲の弟某を訪ね、毎日午後一時間ずつ詩韻の教授をしてくれるとの約束をする。

15日 元老院の開院式が行われるので8時に出頭。聖上より今日開院の勅語がある。夜、一閑亭で本田が会主となり書画会を開き、児玉・恒庵・高崎など出席。大阪柴為の俵喜藏が来る。伏見の八百屋五兵衛も来る。

16日 午後、山田・土方・山尾・平岡・桜井等と皇居造営場を検分する。宮内省は紅葉山の方へ引いた方が良くと評議

一決。夜、豎山八郎・山本伊八・岡部勘兵衛等来る。

17日 二階で陪食を命じられ、有栖川宮・伏見宮・宮内卿・同

輔・副島・元田等同席。予は宮中に勤めてはおらず、時々近侍の列に加えられることは歎慮によるものと聞き、真に感佩骨に徹する思いである。今日土方久元と皇居造営の件につき言上する。午後水交社で能があつて、三吉吉左衛門の勸進帳が最も優れていた。

18日 午後から石井邦猷の青山別荘に鴨取りに行き一番を得て帰り隣農舎に放す。

19日 椎原・岡部・帰県につき晩餐を饗応する。西郷・大山・益満等も来る。

20日 齒痛のため不参。夜、佐藤・児玉・平岡・林・大野等と晩餐、囲碁。

21日 椎原・岡部・熊吉等出発。

22日 15時から画会に菊画を出す。くじ引きで一幅ずつを取る。ことになり予は和田の松を入手。鹿下町人荒巻某も来る。来月は百事如意の画題に当たる。

23日 水交社へ行く。石井・桜井・芦沢・奈良等来る。

24日 今日より出勤。午後幸蔵・七之介来る。戸越村所有地第千百十一番字宮前地券四十七枚持参する。今日から鹿兒島上町の人三雲を雇う。夜、恒庵と青山を訪ねる。会の牧場の規則によれば、馬を増やせばそれに応じて昇進することになっているという。鰻その他の馳走に預かる。越後の人から書画を頼まれ、正治は在国勤務在家儉と書き、予は菊を書いて与える。

25日 税所より来簡。

庭上鶴馴

遙けくも仇し国辺をよそにして

お庭になるる天の田鶴かな

右の歌を高崎について差し上げる。清水を連れて岩倉公に参上。これは新燦社職人どもの積立金並びに救恤の方法を申し上げるためであったが、病床にあるので暫時対話した。書画鑑賞会に赴き、帰途日本橋に出て榛原で紙を買う。そこから新橋玉屋に行き休息。薄暮、宮島と共に帰り夕食。入浴後天神に参詣し梅を買う。六十銭なり。宮島へ招かれ、重野・三浦・伊馨等同席。宮島の倅唐韻を読む。今日二階で御陪食を命じられ、近衛殿・九条殿・久我殿・徳大寺殿・島津殿・土方など同席。食後、忠義君を御前へ召され、左の色紙を賜る。

島津忠義が家に久しくつたはりし犬追物を見て

古の由井の浜手の跡追ひて

弓矢取る身の勇ましきかな

真に冥加至極のことどもなり。これより先吹上禁苑にて犬追物天覧の節忠義君より奉られし歌に

思ひきや浜手の浪の立ち帰り

かかる御代にもあはぬものとは

夜、土方より招かれ大隈・西郷・東久世・佐野・上野・岩崎弥太郎等同席。

28日 海軍省へ行き、生徒の中村の洋行の件につき小森沢に話す。

瑋遊軒で弄玉、大山で小集刀数本の目利きがあり、秋月家の行平・則重等の名刀もある。23時頃帰宅。

29日 米華亭で荒巻の催した画会がある。

30日 9時30分参朝。孝明天皇祭で酒肴を賜り、11時過ぎ帰宅。

31日 川村参議が来て、中村生徒の件について相談する。水交社へ行く。

2月1日 山田氏が来て、順聖公のお社再建のため百円の寄付を頼まれる。高木、刀を見に来る。三島通庸・肥後七左衛門来る。午後新橋で玉突。大倉組みに上着を誂え帰宅。

2日 井上勝から申し立てのあった柳ヶ瀬の方へ鉄道の架設を軌道修正する件の見込みについて工部省に行き、山田と相談する。水交社へ行く。夜べールが来て、ベルツの工部省への雇用の件について話す。羅漢の画と愚極禅師筆の達磨の画が届く。

3日 横浜灯台局を検分する。越後の石炭油の試験結果、英国油に劣らないとのデータが得られたという。ハーブルを訪ね時計を取り替える。夜伊地知貞和・田中太・荒巻・岩屋父子等来て、画会。

4日 正治今日から熱海へ行く。今夜、宮島で談話、恒庵も来る。税所に手紙を出す。また税所に贈る毛衣を帰県する。豎山・山田等に託す。

5日 地方官会議の開院式に臨幸。霊岸島の大黒屋で荒巻が会主となって画会を開く。昨夜から今朝にかけて浜町辺に大火。

7日 大山家の新宅の普請を見に行く。八百屋五兵衛死去の知

らせあり。今夜、宮島来訪し猪を料理して馳走し歓談に時を移す。

8日 木根川に梅見に行く予定であったが雨のため中止し、宮島・伊地知と同道して鞭之湯に行き薄暮帰る。野津藤より書状が来て、八、九兩年渡しの不足の利息を渡した旨報告があり、すぐ返事を出す。深沢より鴨到来。

9日 ベールから吉田清成の送別の午餐会に招かれて、西郷・川村・大山等と出席。今日水交社に二千円の下賜があったと聞く。前田正名の直接貿易説を読む。

10日 水交社に行くと、天皇から二千円の下賜があり、一同欣然。夜前田の貿易論を読む。正治が熱海から出した手紙がつく。

11日 清国公使館へ年賀に行く。

12日 宮内省へ出頭。皇居造営の件につき評議。12時から伊集院宅で昼飯を馳走になる。井上鉄道局長も来る予定であったが不参。島津忠寛殿入社し今日より出席。岩下・児玉・高崎・伊地知・堀・大野父子・和田・荒巻・池原等来る。日南から蘭の画法を教授される。

13日 工部省へ出仕。帰途、伊藤・松方病氣につき両家へ見舞いに行く。今夕、芝離宮で徳大寺宮内卿主催の懇親会があり、皇族・大臣・参議その他勅任官三十名ほど来る。

15日 児玉少介が来て馬車鉄道の話をする。9時過ぎから木根川の梅を見に三浦安・宮島・伊地知馨を同伴して船を浮かべ、柳島の橋本楼で午餐し、木根川の梅を見る。里正の旧宅で七八百年以前の家で今は柱だけが残っている。

勝安房の家にいた婆と娘がいて茶菓を出す。帰途、臥龍梅をみる。臥龍梅とは光圀の命名になる物といい、もつて由来の古さを知ることができよう。林信の詩あり、

暗香疎影橫地秀

氷姿玉骨帶霞坐

帰途、大伝馬町の高木で硯墨を買う。宗及の日記がある
と三浦から聞く。その日記の中に柏毛一匹きて家康公に
逢って帰ったという。これは信長の本能寺の変の時宗及
宅で茶会があり、そこに公もいたからという。三島某に
面会する。

16日 水交社の臨時会があり、クラブ新築の件と委員の投票が

あり赤松・石井省・長谷川の三名が選出。

17日 井上勝、下阪につき暇乞いに来る。坪井晋来る。午後精
養軒に行く。蜂須賀・長岡・上野等来る。柴為より栄次
郎の容態を報告してきたので返事を書く。税所篤清より
お歌初めに出す和歌と手紙が来てこれにも返事を書く。
今日から高崎鉄道の測量開始。

18日 午後、水元へ梅見に行く。同行は山尾・中井。茶は青花
という第一等の饗応なり。今夕、渡辺千秋その他、県令
高崎・三島・永山・大迫等が上京し、精養軒で晚餐を饗
す。出席は西郷・川村・野津兄弟・大山・上野・吉田等
なり。

19日 終日雨風激しく不参。

20日 工部省へ出仕。帰途水交社へ行く。川村・赤松・長谷川
等来る。

21日 下条が来る。愚極禪師の一幅を明日鑑賞会に出品する

由。愚極は六百年前の人という。山尾が別荘へ行くのに
便乗して、品川へ行き午餐を取ろうとするが、雨が降り
出したので12時の汽車で帰り新橋で戯球、晩暮帰宅。税
所から手紙が来て、お光の病氣よろしいとのこと。今晚
一時頃大地震、七十九度ばかりの由。横浜は殊に強しと
いう。

22日 岩下・伊地知恒と同道で鑑賞会に行く。猩々翁の布袋大

黒等の三幅、霞樵、華山などの名福あり。予の羅漢、達
磨の二幅も出品。午餐後、新橋で一時間ばかり戯球して
から芳川へ行く。碁会があつて酒井安次郎と内垣が手合
わせする。川村・稻垣等来る。22時過ぎ帰宅。

23日 今日の新聞にロシア皇帝の宮殿に地雷火が仕掛けられ、
晚餐中に爆発し幸いに帝は逃れたが、兵士に死傷者が出
たという。

24日 平岡と同道して宮内省へ出頭し、皇居造営の件につき評
議。午後小河一敏の使い塩田益穂が来て月照上人の履歴
編集に関してのことなり。記憶していることを話す。近
頃内閣改革の風評あり、第一国立銀行の渋沢喜作が米相
場に失敗し、八十万円ほど損失大混雑との風評あり。午
後水交社に行く。お沢くる。

25日 10時西の丸へ出張。杉・土方・平岡・桜井その他の職員
も出頭し、先ず謁見所の場所に杭を立て御座所の位置を
定める。皇后の御座所を表の方へ押し出す件につき評議
する。川村へ手紙を出す。但し社長の内なり。水本成美

より芍薬を贈られる。今夜天神の市に行き柿二百本を買う。

27日 小河一敏へ手紙を出す。本田親雄熱海から帰ったといってくる。佐野氏来る。用件は中島某とコックの件。

28日 今日不参して、寅を連れて隣農舎へ行き、18時前に帰る。正治より来簡。

29日 今朝小雪があるが直ちに消える。宮島・本田来る。通町辺を同行散歩して晚餐。矢島来て旅費五円遣る。甘楽郡長小林義夫来る。

3月1日 山尾・芳川が出省し兩人に昇進の祝いを述べる。今夜精養軒で小林義夫に晚餐を振る舞う。帰途新橋で戯球。22時前から雪降り出す。

2日 今朝大雪。石井電信局長拜命の挨拶に来る。今日不参。終日雪降る。

3日 雪払いを命ずる。山尾に西国行きを話しておく。水交社へ行く。

4日 吉田豊文近々帰県の由にて来訪。15時頃から水交社定例会に出席。

5日 井上・上野工部省へ来る。今夜大山方で晚餐の馳走になる。

6日 工部省より新橋へ出て遊玉軒で食事し、大倉組で襟などを買い、日本橋の越後屋で海気一匹・夜具襟・被布裏等を買ひ、常盤橋より竹橋に入り半蔵へ出て岸良の宅に行く。画会があつて森山茂・木場・伊地知等来る。税所から手紙が来て、黄曾周の尺牘帳を清国公使館で鑑定して

欲しいとの依頼なり。

7日 本田と通町の骨董店を見る。紫檀盆・火取り・肉池等を買う。日本橋近辺で午餐、16時から两国橋柏亭で福島・青森・宮城・山形・秋田・新潟等の県令並びに小森沢・安場・奈良原等と会う。初更頃歩いて日本橋に出、通町を過ぎ新橋まで散歩して帰宅。北門急務二冊を買う。

8日 雨。午後から小森沢に招かれ、浜町一丁目常盤屋に行き、本田・高崎五六・山吉等と会飲する。いささか風邪気なり。狛林が釜石より帰府の模様を聞くと大奮発しなければ難しい模様とのことなり。

9日 釜石の件大いに奮発したく山尾に談合し同意を取り付け、且つ英国で鉄の価値が非常に貴く早く買い入れなければ日毎に騰貴し大損失を被るとのこと、この件の談判のため大蔵省に赴き、佐野に面会して委細を説明する。元老院から刑法草案一冊配達になる。

10日 松方が来て奥州鉄道是件等相談する。三浦・宮島が来て昼から夜まで話す。

11日 元田侍講が来て士族教育の件について御下問があり、謹んで拝聴する。

12日 午前参朝し、御学問所にて拝謁し、昨日の御下問につき言上したところ、天皇より実に詳細なるお話があり殊に士族の授産の御心配は真に有り難きことと恐れ入る。午後山尾氏来る。

13日 浜離宮の池でお釣り上げの鮮魚三尾下賜とのことで宮内書記官持参する。林次郎左衛門来る。平岡が来て岡書記

官の件を聞く。吉川で針治療。

14日 今朝、伊丹重賢が来て本田の件を伊藤に申し入れて欲しい旨の依頼があり、書状を伊藤に出したところ、早速返事があつて遠からずしかるべく相談するとの快諾を得、また副島の一件についても書きよこす。大久保の洋行するについて餞別をやる。幸蔵・鎮武等来る。今日島津忠寛殿の大崎村別荘で画会があるが病気で行けないため秋景遠渚ノ図を書いて送る。

15日 終日気分優れず。

16日 太政官書記官より諸処への出張命令書来る。野津藤州より手紙来る。児玉少介が見舞いに来て菓子一折と新文詩一冊を貰う。平岡が来て皇居の件につき相談する。宮島鶏一羽を持って見舞いに来る。

17日 今朝本田来る。午後佐畑が月給を持参する。長崎用蔵来る、駕籠金山検分の一件なり。

18日 夜、宮島来る。正治から熱海土産来る。

21日 元田来る。御下問の件、副島の件なり。渡辺千秋・三浦安等来るが皆会わず。

22日 今日より出仕。午後山尾へ行くも不在。竹ノ舎で澹泊社中送別の宴が開かれる。

23日 午後参朝。夜、宮島来る。

24日 13時出発。福田・万里小路等新橋停車場へ見送りに来る。14時30分発の列車に乗り横浜に向かう。佐藤・児玉・幸蔵・正彦等横浜まで見送りに来る。藤田幸右衛門宅に立ち寄りおもとの縁組みにつき絹縮一反を贈る。灯台局に

行き佐伯・内垣等に面会。高砂丸は満員で切符が買えないため郵便船千穂丸に乗る。風が激しく乗船に苦しむほど。華族の一柳某・朝野新聞記者末広某等同船。17時15分解纜。風は穏やかに月は明らかにして富岳月明の中に現れる。観音崎及び神子元灯台の火光相映し、心神すこぶる爽快なり。大島の側を通る頃寝につく。

25日 風波少なく船やや動揺する。今朝も富岳を望む、また快然。22時頃紀州大島の灯台の光を見る。

26日 朝8時過ぎ神戸に投錨。松方・石井・渡辺千秋等先に到着。常盤屋でしばらく休憩する。応接所に行き松方・税所等に面会。広業商会で午餐。12時25分発の列車で大阪畑中に行き、沖繩県令鍋島に面会する。五代が来て、一緒に山中・後藤等の道具を見、中之島の五代の別業で晚餐。

27日 税所帰県する。鍋島を訪ね、紙政に寄り、田中芳男が主催する綿糖共進会に行く。宿に帰り午睡し、15時に宿を出て梅田停車場に行く。あわてて乗ったため神戸行き列車の間違つて乗り、西宮で京都市行き列車に乗り換え18時西京に着く。錦小路上る麩屋町鍵屋直次郎（本名竹内）方に投宿。この楼は安政戊午の年西郷等と長く滞在して最も懇意な所である。

28日 朝8時五条橋まで歩き、そこから人力車で稲荷及び北野へ参詣する。中路へ立ち寄るが妙心寺の法会とのことで不在のため老婆としばらく話し、去るにのぞんで老婆に二円やる。これまでの車代は二十四銭なり。八田知紀の

歌あり

宮人の袖のゆかりの葦草

今も匂へり長岡の里

北野の鳥居前で午餐し、人力車に乗り、御霊より下加茂に参詣する。一の鳥居の前の堤より人力車に乗り八坂に行く。車賃は十八銭。そこから歩いて幹山の磁器製作所を見、清水に詣り暫時休息後下山して六兵衛に行き、急須茶碗を買う。代金は一円五十六銭。そこを出て人力車で16時過ぎ宿に戻る。車代は五銭。夜、中路・恒川来る。

29日

朝、昨夜上京したという佐伯・内垣が来る。中路は昨夜泊まり、同道して相国寺へ墓参。そこから三樹上井筒に行き、売家を見る。また陽明家桜木御殿も売却するというので行ってみると西京第一の邸宅と思われるのに三千円という。恒川より卓来る、中道は帰る。茶や美濃部が来て、外国人は一斤三十銭から四十銭ぐらいの品を主に買ひまた八十銭ぐらいまでの品も買ひ入れるという。茶の煎じ方は湯を冷まし少しずつ入れて六煎までではなく、その後熱湯を入れるという。小服は永くいでず、小倉はいくども湯をさしていずるといふために、両所の茶を合わせて売るといふ。玉露一斤を買ひ、一円八十銭なり。午後から雨。石井省が来る。、松方は三景楼に宿を取り、訪ねて行き明日桜木を見る約束をする。

30日

恒川が来て、春日卓の買入れの約束をする。松方との約束を取りやめ、佐伯に手紙を出し、伏見に行って八百屋五兵衛を訪ね鼎をとり川船で下る。御香ノ宮に詣で十

三年後とのことと知り、20時頃八軒屋に船をつけ畑中に帰る。税所が宿で待っていた。

京都より伏見までの車代 十銭

川船賃 一円二十銭

羊羹 四十銭

鍵直 二円二十銭

同所 四円六十銭

着代 一円

佐々木 一円七十銭

孫介 一円

恒川 十円

内一円九十銭孫介より返す

31日

佐伯は今朝先に神戸へ出発する。柴為が来て彼の家で午餐。宗及所持の瓦硯を買う。徐輝の幅を見る。13時過ぎ畑中を出て鉄道局に立ち寄り、15時25分の列車で神戸へ行き常盤屋に着く。船の出帆が延びたのでまたすぐに上阪し、柴田と金比羅社内の落語を聞き、同家に泊。栄次郎来る。

4月1日

屋形船に為介・喜蔵・その妹等と桜宮辺に遊ぶ。桜花はすでに三、四分はころび火の口に船をつけそこから上陸する。この日の費用は全て為介の馳走。そこから人力車で梅田へ行き、14時発で神戸に向かう。田子の浦丸に乗り、20時に出帆。渡辺千秋・一柳某・田中長兵衛・川元覚左衛門等同船。

2日

順風快然、朝10時頃高知沖を航行。長崎より五島まで八

十人ばかりの客があり、航程六時間で達するという。また対州までは10時間、対州より釜山までは8時間で毎航百人ばかりの船客があるという。釜山飢饉の節には朝鮮の女性が日本船に来て春をひきいで飢えを凌いだ者があつたが、後日斬罪に処せられそれから日本人を恐れることが甚だしいという。晩景、姫（一字空白）辺を航海する。船中に農民風の体つきの者を見て尋ねると江州の商人で大島に行って蚊帳と砂糖とを交易するのだというが、土地には全く不案内なのに、たった一人で渡海するその勉強ぶりは他の商人の及ぶところではないであろう。快晴。朝、種子島を見る。12時頃佐多岬の側を航海し開聞岳の景色絶美なり。

いにし年ここにてよめる歌思いいでたり

薩摩かた開聞山の山のごと

開けて国は動かざらなむ

知林島辺で鳳瑞丸に行き会う。16時過ぎ前の浜に投錨。今日は神武天皇祭で家々に旭旗を掲げている。この西南の果てまで皇威の及んでいることに喜ぶ。上陸すると岡部・大脇岸頭に出迎えている。浜崎太平次の家に宿る。今夜大脇に行き一泊し、お豊の件で相談にのる。

4日 南林寺に墓参。帰途岡部で椎原に面会する。宿所に帰り、午後から山本正助を訪ね、そこから大脇に行き、先考十三年祭の準備を依頼する。正之丞を同道して野津に行き夜に入って帰宿。石井忠亮と三池から電報が来る。

5日 9時から岩村県令宅で終日暮会。土岐・木藤・小宮・山

上村伝兵衛等同席する。また椎原与三次・渡辺千秋等も来る。

6日 椎原孝助・大山精之介・福山清蔵・岩元清蔵等来る。椎原より菓子、大山から肴を贈られる。県庁へ出頭し、金三百円を学資金として寄付する。正午より大脇へ行き祭事を執行する。客は野津石神吉夫婦・中馬・田原吉之丞・岡部与兵衛中村未亡人・木尾未亡人・幸畑家内母子なり。お松も来る、七十三歳になるという。福岡県より電報来る。祭事の費用は金十円。幸畑・牧両家に金五円。

7日 10時小蒸気船両国丸に乗り、加治木へ行く。11時過ぎ到着し、田原健蔵に面会。暫時休息の後、家令橋口を同伴して山ヶ野金鉱を見る。金山入り口まで九十四里半ばかり暮れに着く。伊地知弥平太・川上元兵衛等来て、酒肴の饗応あり。伊地知正治の甥も来る。正治より同人への届け物を渡す。

8日 器械所より樋内まで検分する。永野水車まで七合位の間諸処樋あり。永野で有馬（元）三五郎に会い、昼飯を馳走になる。内山弥左衛門の鉱物発見の話などが出る。図書久元の像を見る。そこから山神に参り、帰途外国人オジエに面会し本坑について同人の意見を聞くと次のように述べた。

一、当分一、二年の間は現在のままとし、縦坑を貫き、器械を増設すること。

一、半腹を上採掘しても金銀山は鉱物が底にあって上に吹き出すのが規則であるが、中には山上ばかりにあ

る山もある。これは例外である。

一、山ヶ野は甚だ不規則な鉱脈であるが漸く見込みが立つてきた。

一、十年、二十年は鉱石は尽きることなく大丈夫で利益も上がる。鹿籠は良い山で規則も正しく、予は良いといふことはめつたにないが、あの山は必ず見込みがあると思うので良山と申し上げる。

9日 7時に山ヶ野を出て加治木まで歩行する。田原健蔵が待っていた。東風が強いため小汽船を寄せることができず、やむをえず馬を雇って磯道を帰る。滝ヶ水から日が暮れ21時頃漸く浜崎に帰る。佐伯が発病し、甚だ心痛する。

10日 岩村・伝兵衛・小宮山等も来て暮。夜、中村源吾に招かれ椎原・渋谷・中原・木藤・荒巻等同席。明日から鹿籠行きの約束をする。

11日 7時駕籠で出発し伊作山を経て湯元に一泊。戸長等来る。伊作の学校を参観する。出師の表を講じていたが真に感

12日 心する。日新寺門前で午餐し竹田神社に参詣する。16時精錬所に到着し、坑内を検分、井上九介に面会する。伏見の戦争以来の会見で今夜は事務所に一泊。

13日 第二精錬所等を見た後、昼時枕崎に着く。今日馬集せがあり、出かけてみると甚だ面白い。夜の酒宴は盛大。喜入家の刀剣書画を見る。雲(一字空白)如雪の二幅を買う。三円と二円三十銭なり。

14日 坊津に廻り双剣石を見る、奇観なり。夜、河野に泊。大馬を見る、九寸五分ありという。

15日 谷山で午餐し、14時宿に帰る。夜大脇に行き、与平も来る。

16日 岩村と学校・授産所等を見る。郡長の有馬純行に面会。磯に行き東郷に面会。岳飛の真筆見る。夜は林直次郎方で渡辺西洋料理の饗応を受ける。梅堂・平山等が来て絵画の揮毫あり。

17日 浄光明寺・大徳寺・南林寺等へ墓参。大山・椎原・大脇等に暇乞いし、荒田邸へ行く。夜は渋谷に招かれ琵琶を聞き、刀・画を見る。歌あり返歌する。

18日 七時前に出て、人力車で市来着。横井に七円遣る。中村が待っていて渋谷も後からここまで送ってきた。市来で午餐後、馬に乗り向田弥三右衛門の家に宿。浜崎から人が来て金塊を忘れたとて送ってよこす。夜、四郎助・助左衛門が来て鯉一尾を持参。

19日 勘兵衛来る。夜通し歩いて来たといい、一緒に八幡宮に参詣し、一円を寄付する。本道まで送られそこで別れる。西方で午餐し、15時頃阿久根着。源兵衛宅に宿り、内垣と囲碁。頼山陽の書を見る。

今日道すがら諸方を詠みて
幾たびか往来なれにし薩摩路は

山さへ野さへ懐かしきかな

20日 14時船に乗り、終日天草灘を航海、退屈限りなし。

21日 朝8時茂木着。駕籠で長崎にいたり、上野に投宿。夜、羽太に招かれ小林等に面会する。

22日 伊之介へ 三円

小遣い用 二円

昼まで休息し、午後内垣と博覧会を見物する。蒔絵物・香盒を買う。代金は各三円五十銭。夜、西洋亭へ食事に行く。渡辺千秋に手紙を出す。

23日

午後、内海を訪い、管下に国会論は格別無く、また士族授産方は全く無いという。木原儀四郎党は勤王で道徳を修め緩急あれば王家のために尽くすべしと大阪で板垣に勧告した書状があるとのこと。家永党は江藤に与し、多くは除族云々。他に征韓党があるが微々たるものなりと。耶蘇は浦上のカトリックに入る者はなく、プロテスタントの者追々あり。浦上の豪農三、四家が該宗に入っていないために、臨時に使用人を雇う時に該宗の信者は不信心の者と共に耕すことを好まず謝絶する者が多い。そのため事業に困ることが多く、また信者は暑中も筒袖を着て耕すという。後藤象・白木等来る。今日風波強く、港内で船が沈没して溺死人ありという。支那人が物売りに来て墨一箱三円・ヒスイ急須二円で買う。新燈社を見る、生熊東上したよし。三池石炭運送賃六十万円の内四十万円は外国船に取られるため、急ぎ帆前船を備えたい旨小林から聞く。

24日

造船所を見る、ドック利益ありという。午後、佐伯・内垣と骨董を見に行き、茶盒一個二円五十銭で買う。割烹店で晚餐後帰宿。

25日

朝8時長崎を出、小林夫婦・羽太等も同行し、火見峠を越え、細羽村で午餐。そこから三池丸に乗り口の津着。

灯台を見てここに一泊。

26日

口の津を出帆して島原港に着く。直ちに城下を巡覽し、釘隠し十一個を買う。一個十九銭。午餐後、乗船して土黒村へ港の検分に行くが風が荒いため上陸できず島原に引き返して一泊。

27日

早朝出帆し三池着。士族小野折江宅に宿り、囲碁等で休息する。

28日

役所に出頭し、ホットアその他の人と大浦・梅谷の両坑を見るに実に広大な炭坑で今後百年間では堀尽くすことが出来ない程の埋蔵量があるので築港すべき提案をホットアより聞き、後日書面で提出するよう話す。夜、小林で晚餐。

29日

終日鉦山を検分し七浦で午餐。諏訪山・四ツ山等の海辺も見。今日は六、七里ばかりも歩行し大分くたびれた。

30日

8時前に三池を出発し、小林夫婦・属官等に送られ久留米で午餐し、19時太宰府大野屋に投宿。

5月1日

天満宮に参詣、神前で天国の劍・御筆を拝見する。

離家三四月

落涙百千行

万事皆如夢

時々仰彼蒼

その他宗近・行平・信国等の刀を拝見するがこれらは寄付された物。観世音寺に入って見る。また都府楼に古跡を見る。瓦二枚を拾う。そこから馬車に乗り、12時頃博

多京屋に着く。渡辺県令・荒木某等来て、用談に及ぶ。
夜、小林・ポットア等来る。

2日 市中を徘徊し、午後渡辺・森・小林等と箱崎の茶会に行
く。久留米士族内藤某所有の器・元人の画等は尤物なり。
内藤から樟虫織敷物五枚を買う、一枚四円なり。

3日 8時に博多を出て、箱崎八幡宮に参詣する。赤間で午餐。
薄暮、直方村の質屋某方に一泊。当村第一の豪家の由。

4日 直方村を出て、豊前の国田川郡赤池村の石炭山を見る。
距離は二里半ばかり。ポットアが鉄鉞を発見し、分析後
もし用に立てば広大な利益となるであろう。17時頃直方
村に帰る。小野友五郎父子来る。この人去冬鉄道測量の
ため出張していたといい、測量図を一見。一同我が旅宿
に集まる。

5日 新入村の第二ボーリングを見る。豪農の青木家に休息し、
そこから川船で鉄道線路を検分し、船中で午餐、一里ば
かり下流から上陸して諸処の線路を検分。17時頃黒崎に
着き、一泊。この夜、小野を呼び寄せ明日検分する場所
を決め、馬関へ渡ることにする。志津作の刀を買収する。
6日 朝7時に出て二里程後にもどり、陣ノ原という所から諸
処を検分し、船で若松炭塊社を見る。フランス人マイト
に午餐を饗応される。該社は相応の器械を備えている。
雨天のためやむを得ず若松に一泊。佐伯と猪之介を荷物
と一緒に馬関へ先発させたため、この一泊は甚だ不自由
で、内垣と碁を打ってから休み衣類は旅館から借用する。
7日 途中を検分しながら小倉まで歩行し、同所で午餐。人力

車に乗り大里まで検分し、そこから船に乗り薄暮馬関に
着き一泊する、三井銀行なり。

8日 渡辺・ポットア・永井は帰る。11時に高砂丸入港し、小
野友五郎父子に暇乞いして乗船。清人・ヨーロッパ人多
数の乗客があり、石川良平も同船。この人山県の妻の父
なりという。14時40分頃抜錨。朝石井から宿元が無事の
電報があつて安心する。

9日 海上は至極穏やかで景色いわんかたなし。千里江陵一日
還の感あり。14時半頃神戸に着く。常盤屋に上がり、17
時過ぎの列車で上阪、畑中に泊。大脇正之丞が今朝大阪
着のこととて面会。税所は子の到着を待っていたが、先
程帰つたと聞き直ちに喜介と同車して市村に行く。23時
頃まで話し寝る。幸蔵より来簡。

10日 富岡来る。14時頃市村から大阪に帰る。夜、山中吉来る。
11日 税所来る。夜、紙政へ行く。柴田も来る。本日、博覧会
を見る。

12日 今日から生野へ行く。兵庫県属須本某・原大書記官等停
車場に出迎える。明石で午餐後、姫路の井上楼に一泊。
この地の郡長は鹿兒島人久保某なり。

13日 屋形で午餐、15時頃生野着。直ちに分局・器械所を見る。
夜、朝倉・江崎等来る。

14日 神子畑へ上る。朝倉・大沢等同道する。近頃好調で、鉞
脈が九丈ばかりもあつてフランス人ムーセも驚いたとい
う。18時過ぎ生野に帰る。この日美玉三平らの墓に参る。

15日 7時に生野を出て、姫路の辰方で午餐、久保が待ってい

た。正宗・行光の刀を見る。正宗の作が最も優れており、値段を知らせてくれるようたのでおく。19時神戸の常盤屋に着き、湊川まで須本等が出迎えている。

16日 工務分局長佐畑に面会する。12時発の列車で上阪。知事建野一昨日帰阪したとのことである。君辺の近況・副島等の様子を聞き、書記官等に面会する。五代も来る。

17日 午後から堺に行き、市村に泊まる。

18日 朝、富岡・古川来る。古川から久国の剣一口を買収する。これは豊公の差料と伝える物で代金は十円なり。9時過ぎから大和に行き、神武天皇陵を参拝する。高田で午餐後、穴虫峠を越え薄暮奈良に到着。

19日 佐伯・内垣・大脇と春日社八幡宮へ参拝。正倉院を柵外から見、大仏・博覧会を見る。ここで税所と会い日本古図の小屏風を買い代金は四円五十銭。

20日 奈良を出て西京に行き長池午餐し、三本木清輝(暉)楼に投宿。夜、三景楼に登り、税所はここに泊まる。

21日 博覧会に行きメリヤス襦袢等買う。井上勝来る。夜、文石堂に行き片山某にあり、学者だという。○○の名筆を見る。

22日 税所・富岡に別れる。午後、大脇と相国寺に墓参。そこから竹角に行き刀剣を見る。ここで大脇に別れ清水寺に参り、下山のついでに月照上人の僕であった重助に面会する。観音の前に茶店を開いており往時を語る。月照没して二十三年になるといい、十七回忌には薩摩に下り祭事を執行了たという。先年、十二月京に帰り直ちに入牢、

翌年赦免されたという。別れに臨んで金二円を与える。

23日 8時に出て鍵屋に立ち寄り9時発の列車に乗り、大谷を経て大津の宿に着き、福井で午餐。大脇と猪之介は伊勢に、内垣は神戸から汽船で帰るのでここで別れ、佐伯と琵琶湖を汽船で渡る。イギリス人某と同船し、かれは横浜二十八番館に住み、花を取る人という。15時頃米原に着き、休憩後番馬・醒ヶ井を経て関ヶ原に着く。恵比壽屋に投宿。満月東山に明らかにして懐旧感慨の情しきりに起こる。小出豊久の戦死は伊勢の間道クトウ坂という。

24日 早朝、関ヶ原を出て竹中半兵衛・義朝等の古跡を経て10時過ぎ岐阜に着く。

25日 朝5時岐阜を出て、郡上八幡に赴く。鉄・石炭視察のためなり。須原で午餐し、18時頃八幡に着く。杉本五兵衛宅に投宿、豪商なり。この地は岐阜から十三里の山奥ながらかなりの都市で元青山大膳亮の領地という。

26日 今朝も早朝に出て山深く入り、14時頃坂本村着。国田玄秀という医師が待っていてそこから十三丁先のミソレ村着。休憩後鉄山に上る。ここから十二丁先は飛驒の国境という。この夜、坂本村の百姓青木京右衛門宅に泊。

27日 早朝坂本村を出て畑佐の銅山を見、昼過ぎ八幡に帰り一泊。この地の某が今春東京に出て向島・上野等の花を見たといつて色々物語り、短冊をもって来て何か書けとすきりに言うので

住み慣れし都の花の音信を

音に聞くさへ嬉しかりけり

足引きの山の幾重は分けつれど

猶敷島の道はありけり

28日 八幡を出て上田から川船に乗り長良川を下って、17時頃
岐阜に着き玉井に投宿。暫時休息後車を飛ばして笠松か
ら船に乗り木曾川を下る。

29日 朝5時桑名に着き、車を飛ばして四日市に赴く。山口直
友酒肴を携え来て談笑数刻。13時千年丸に乗り14時出帆。
30日 17時横浜着、幸蔵が出迎えに来て、17時45分発で帰京。
子供ら大いに喜ぶ。大山来る。

31日 宮内省へ出仕。宮島と伊地知正を訪う。工部省にも出て
山尾に面会。

(未完・以下次号)